巻頭言

# 土木の仕事

辻　　靖　三

2015年が明けましておめでとうございます。新年を迎えるに当り，新たな気持で一年に期待を込めるものです。

当協会も1950年に社団法人日本建設機械化協会として発足して以来，2008年に一般社団法人日本建設機械施工協会と引き継がれて，本年で65年目となります。全土に亘る戦災復興から，国民の生活・活動の基盤を営々と造り上げてきて，今日の国土となっています。

また，更に遡ると，昨年は土木学会創立100周年で，日本の近代土木の節目でもありました。記念の土木学会誌11月号に曽野綾子氏の寄稿がありました。氏の土木に対する気持ちが素晴らしく表現されています。私の解したことで紹介します。

『古来人間は経験で近隣の人間との争いにも勝たねばならなかったが，同じくらい自然を治めねば，その土地の主になることが出来ないのを知っていたのだろう。人間社会と同じで適切に相手を生かす環境をつくらねば，どんな才能も自然も繁栄しない。今日までの日本を見ても人間社会は矛盾だらけとわかる。生きるためにはなにかを捨て，本当に必要なものから順に選んでいく他はない。そこに人間の英知の苦悩もわかるものだ。現世にはベストもワーストも殆どない。人間が選べる道はベターかワース（「よりいい」か「より悪い」）かのどちらかである。』と，述べ，『国土を整備することは何よりも輝かしいことだ。人は自分の利益を考えるものでもあるが，それだけでは満足しない。他者のために働けることで，初めて満たされるものである。…土木の仕事ほど後に残るものはない。…しかも名前もなく仕事だけを残していくからこそ，その芳香を放つ。土木の仕事を支えるのは，人間の信念と勇気しかない。信念も勇気も，現実は深い人間性にまぶされている。信念は揺らぎ，勇気も傷つくことが始終であろう。しかしそれが人間の証なのだ。』と，土木者にエールを送って頂いています。

日本は成熟社会を創りあげたが，成長期とは異なった様々な課題がでてきているのが今日です。成長の基盤への投資の無駄・不要論が譴責されている間に，大災害を受け，災害国であることを再認識し，形成した資産の効能の持続・更新の分野の重要さが顕在化してきました。しかし，その担い手である建設界の体力が弱体化してきてしまい，特に地方では深刻です。国も方針転換で動き始めましたが，土木界全体での大課題です。曽野氏が評価され，負託されている土木の重要な役割を，これからも綿綿と果たせるジャンルであるとともに，生きがいのある仕事であるものとして，引き継いでいきたいものです。

土木の仕事は，単に工学分野ではなく，経済，社会，環境等の多分野に亘る総合的な見地から，国土計画，地域計画の政策課題を具体化し，具現する役割であると思います。地球に人工物を設ける仕事であるので，それが関わるエリアは，自然環境があり，人々が生活している場です，よく調べ，調和を図り，合意形成し，造り，機能の保持のため長年月に亘り維持管理します。そのライフサイクルの全体が，土木の仕事であり，使命でもあります。しかし，土木資産の充足論，ストック資産の機能維持への傾斜論が出てきています。

日本が持続的に国勢を維持していくには基盤整備をする必要はないのか？既定計画の，道路・鉄道・空港・港湾等の交通施設，ダム・下水道等の水管理施設，防災施設は，整備を進んできてはいるが，それはかなり以前の計画であり，公共事業抑制下で新たな国土計画が出来てきてなかったので，このまま推移していくと，10年後には建設段階のプロジェクトはいか程のものだろうか，大きく危惧される事態になってしまう。果たして日本の国土の整備は造り尽くしたのか，災害に対する強靭な国土となるのか，特に大都市以外の地方では，今後数十年も今のままの基盤で地方創生が出来るのかどうかであります。

土木の仕事は，構想し，調査し，計画を創り，自然・

人間と合意形成し，更に必要な用地を買収するまでの計画段階を経て工事段階になるので，いわば計画段階の成否が，工事段階とその後の維持管理段階の出番の今後の帰趨に繋がります。しかし，計画段階の仕事の主体は行政側であり，それに携わるマンパワーは，これまでの抑制下で著しく機能低下しているように思えます。土木の仕事の全体でのマンパワーの配置は，どうも工事段階に偏重し過ぎていて，最上流の計画段階が著しい担い手不足だと思います。近年の計画段階の仕事は構想力，企画力，調整力等総合的なノウハウを要する仕事です。各地に街が整い，人々が安心して住み，仕事が出来，子供たちが育つ，安定した社会づくりが，地方創生という課題の目指すところと思います。いまのままの基盤施設で推移していくのではなく，10年20年先の地域づくり，街づくりをプランして，実現方策を考えていく人材が重要です。それは，土木の仕事ではないでしょうか。それを現実に仕上げる工事段階，その機能をずっと果たし続ける維持管理段階と繋がっていく土木の仕事が，曽野氏のいう，国土を整備するという輝かしい，信念と勇気のいる仕事であると思います。

今の工事段階･維持管理段階での仕組みでは，近年，目前の契約行為に行政側もマンパワーの多くを費やしている現状です。行政側での要員の減少傾向もあり，先々の計画段階が機能不全となると，土木全体が不全になると危惧されます。土木の仕事の役割全体を考えて，産学官のマンパワーの配置，仕組みを再構築する必要があると思います。まず行政側も工事・維持管理段階での契約行為に携わっているマンパワーを，契約を包括化連続化し少なくする，性能規定的な契約の仕組み・業務管理にする，等省力化し，受注者側もそれに対応して広範・総合的な体制を構成して能力・技術を発揮できる仕組みが出来るか等官民全体が一体とならなければ出来ない，仕組みの変更です。バラバラでは持続的発展が望めなくなります。そのなかで，プロジェクト・ファインディングで，世界のトップレベルの土木技術を実施するフィールドを計画に組み込み，実施できることが出来ると，開発した技術を実績を伴って海外展開できる技術として，海外での貢献にも繋がることにもなります。土木技術は場の技術であり，場が整い，そこでの実現が伴う技術です。

国土の基盤整備の使命を負託されている土木に関わる人々が誇りを持って仕事出来て，後世にも強靭な日本の国土を残すことが，新年の夢です。

最後に，本年も，協会の活動，運営に会員の皆様方のご支援，ご協力をお願い致しますとともに，皆様方のご活躍を祈念しまして新年のご挨拶と致します。

――つじ　せいぞう　一般社団法人　日本建設機械施工協会会長――